

LOVE 農業

愛知県 愛知県立安城農林高等学校三年 野村 佑月

私は、農業が好きだ。自然に触れることの楽しさ。命が成長していくことの嬉しさ。この世界を通して、触れ合う人々の温かさ。農業は、私たちが最低限を生きていくためだけに存在する産業ではない。農業は、私を、あなたを、人々を、豊かにする。農業高校で三年間を過ごしていく中で、私にとって、農業はかけがえのない存在となっていった。

私は、この国の農業を、さらに盛り上げていきたいと考えている。

そう考えるようになったきっかけは、一年生の三学期。教室に掲示されていた、とあるポスターが発端だった。「稲穂に浮かぶレストラン」。安城青年会議所という団体の、六十五周年を記念した特別事業だった。田んぼの上でレストランを開く、という新しいスタイルのイベントに、私は興味を引かれ、すぐさま担任の先生に「これに参加したいです！」と声を掛けた。

切さ。緊張で言葉に詰まりながらも、なんとか伝えることができた。上手く答えられたか不安だったが、インタビュアーを聞いた来場者の方からは、

「今まで農業のことなんて全く知らなかったけど、今日あなたのインタビュアーを聞いて、農業に興味

が湧いてきた。」と声を掛けてもらった。生産者として、多くの人に、農業のリアルを伝えられた。自分の農業高校生としての成長を実感し、心から嬉しく思ったと同時に、私は農業に興味を持つ人が増える喜びを感じた。このイベントをきっかけに、農業高校へ進学を考えてくれた中学生もいて、農業高校生の私でも、これからの農業を担っていく人材の育成に関わり、この国の農業を盛り上げていけるということを肌で感じた。

次は自分で一から企画を考えて、より多くの人に農業に興味を持ってほしい！ そう思った私は、六月に学校で開催される「オープンファーム」というイベントで、動物科学科の生徒の代表として、体験授業を行うことにした。「オープンファーム」とは、地元の方や小中学生が学校の農場を訪れる地域交流イベントだ。たくさんの人に農業のリアルを伝えられる、絶好の機会だと直感した。動物科学科でいつも学んでいることや普段の実習の様子、そして「ウ

それから数ヶ月後、「稲穂に浮かぶレストラン」に向けた準備がスタートした。農林水産省や卸売業者など、様々な方面から農業に携わる方の話を聞いたり、提供する料理の考案、接客対応の練習など、普段の実習では体験することのできない、けれど農業と深く関わりのある、多くの出来事。

中でも特に印象に残っているのは、イベント当日のインタビュアーだった。提供する料理の食材に普段学校で育てている豚肉が使われることになり、養豚を専攻して学ぶ生徒の代表として、私がインタビュアーを受けることになったのだ。当時人前で話すことが大の苦手だった私は、正直かなり憂鬱だった。けれど、「これも農業高校生ならではの良い経験だ！」と思い切り、挑戦することにした。まず、普段の授業や当番実習で行う作業内容。次に、作業を通して感じるやりがい、苦悩、喜びなどの色々な気持ち。そして、そういった作業の中で気づいた、農業の大



シクイズ」と称して、乳牛の簡単なクイズを内容に授業を実施した。老若男女、たくさんの人々を相手に授業をしていく中で、真剣に話を聞いてくれる地域の方や、積極的にクイズに参加してくれる子どもたちを見て、私は改めて、農業の魅力を伝えることの楽しさを痛感した。そして、農業高校と地域をつなぐことで、農業という産業を地域に広め、発展につなげることができると確信した。

そんな中で、私は一つの夢を見つけた。それは、農業高校の先生になることだ。私が安城農林高校で経験してきた地域交流の機会を今後も継続し、農業高校と地域をつなぐ架け橋となれるような存在になりたい。農業の魅力を広めていけるよう、私が率先して行動を起こし、農業高校生の私が憧れた、農業に未来を担う生徒が憧れる、そんな農業高校の姿を目指していきたい。そのために、四年制大学に進学し、農業についてもっと深く学びたい。私自身がより多くの農業の魅力を見つけ、一回りも、二回りも、三回りも成長して帰ってくる！

私が農業を知り、学び、憧れた、この日本で、再び農業が盛んになってほしい。そんな大きな大きな願いがいつか叶うよう、今日も私は農業を勉強する。